

水俣問題が国会調査団の派遣を見るに至ったことは、おそまきながらよかった。県当局、議会、工場、漁民、みな平等にお叱りを受け、われわれまで何だか肩身の狭い思いで

言の発き



あるが、事ここに至ったのは単に怠慢というより、もっと微妙な心持が働いて、あえて無為無策の月日を送って来たのではなからうか。

地方の県市はその地方繁栄のために大工場の誘致を心が

け、そのための多少のギセイには大方が眼をつぶったものである。仮りに当時遠見の人があつて今日のような事態を予言したとしても恐らくは一笑に付されたにちがいない。そういう現実主義的な考慮が

水俣騒動

に感有り

当局にも地方民にもあつて問題の萌芽期はもちろんのこと次第に深刻化してきた近年においてもおま真相究明を躊躇させていたような事情はなかつたであらうか。いわばハレ物と見なしてあえてさわらず

自然にうみつぶれるのを待つていたのではなからうか。しかし、そうだとしたら、一応賢明なようで大局において誤りであつたと考える外ない。

また、工場側としても、全然察しのつかぬことではなかつたろうに、なぜもつと虚心地懐に早くから真実究明対策樹立のために地元と協力しなかつたろうか。それだけの努力がなされていたら漁民感情と第三者の批判もおそらくもつとおだやかであつたろう。結局今度の問題は後進県の事大主義と大資本の冷淡さの合作による不幸な事態と云う感じが深い。